

## 【高等学校の部】最優秀賞

## 湯けむりに繋ぐ未来

大分県立別府鶴見丘高等学校 2年

この  
幸野 まい  
真衣

春の朝、別府の街は白い湯けむりにそっと包まれていた。商店街の細い路地を歩くと、硫黄の香りがかすかに鼻をくすぐり、別府湾から吹く潮風が頬を撫でる。観光客のはしゃぐ声と、地元の人の「いってらっしゃい」が入り混じり、私は胸の奥がじんわりと温まるのを感じた。生まれ育ったこの街を、私は長い間「特別」だとは思ったことがなかった。温泉と観光客で賑わう町。ほんのそれだけ。「どこにでもある風景」と、幼い私は思い込んでいた。

そんな私の気持ちが変わったのは、中学三年の冬だった。学校帰り、駅前の手湯で冷えた手を温めていると、外国人観光客に道を尋ねられた。一瞬、緊張で言葉が出なかった。だけど勇気を出し、身振り手振りを交えながら少しずつ英語で道を説明した。つたない言葉だったけれど、観光客は目を輝かせて笑顔で何度もお礼を言ってくれた。その笑顔を見た瞬間、私ははっとした。別府の魅力は、湯けむりや温泉だけじゃない。見知らぬ人にさえ、自然と手を差し伸べるこの街の人の優しさこそが、別府を特別にしているのだと。

思い返せば、そんな温かさに触れた場面は何度もあった。夏祭りの夜、浴衣姿の人々が商店街に集まり、知らない者同士が笑顔で話す風景。子どもたちのはしゃぐ声が提灯の光に照らされ、まるで町全体が微笑んでいるかのような感覚。台風で停電した夜、暗闇の中で近所の人たちがろうそくを持ち寄り、お互いの家を行き来しながら助け合った日々。わずかな光に照らされながら見知らぬ人の優しさが心に深く染み渡ったことを覚えている。学校で悩んでいた時、そっと背中をさすったクラスメイトの姿。その小さな行動は、私にとって大きな気づきだった。優しさは特別なことではなく、日常の何気ない瞬間にこそ宿るのだ、と。

その一つひとつが、私の心に優しさの種をまいていたのかもしれない。そしていつしか困っている観光客に気づけば、自然と声をかけるようになっていた。手を差し伸べることの温かさを、自分自身で実感した瞬間でもあった。別府という街そのものが私を優しさのある人間へと導いてくれたのだと、今なら言える。

別府の湯けむりは、ただの水蒸気ではない。そこには人と人が繋がり、心を温め合う優しさが詰まっている。この街の空気には、不思議な温もりがある。それは、ここに住む人たちの想いが染み込んでいるからだ。

高校生になった今、私はよく自分に問いかける。

「どんな大人になりたい？」

「どんなふるさとであってほしい？」

私はこう答える。人の心に寄り添い、誰かを笑顔にできる大人になりたい。そして、観光と地元が支え合い、誰もが「帰りたい」と思える別府を未来へ繋げたい。観光客にとっても住む人にとっても、ここが心からの「居場所」であり続けるように。湯けむりの向こうに、そんな別府の未来を私は描いている。

きっと私は、この街を一度離れるだろう。新しい場所で挑戦し、悩み、時には涙を流す日もあるかもしれない。しかし、そんな時こそ思い出さるだろう。別府の商店街の賑わい、別府湾のきらめき、そして迎えてくれる人々の「おかえりなさい」の声。この街が私を育ててくれたように、今度は私がこの街を支える番だ。湯けむりはただの水蒸気ではない。それは、この街で交わされた無数の笑顔と優しさの象徴だ。だから私は胸を張って言いたい。――

「私は別府の人間です。そして、この街の未来を繋ぐ人間です。」